

第8部会

世的生死観とすることができよう。十一不二の偈の中でも、国界平等坐大会（阿弥陀国と衆生界は一つのものであり、衆生はどちらの世界にいても阿弥陀仏が教え説く法会の席についていることになる）が究極の現世的生死観の拠り所となる。阿弥陀国と衆生界が同一であるということは、われわれの娑婆世界、つまり現世が悟りの世界であることを意味し、往生することなく現世で救済されていることを意味する。一遍の思想を究極の現世的生死観とする根拠はそこにあつたのである。

一遍の思想、つまり現世的生死観は一遍自身が武士であり、名門の河野水軍の出自も手伝って当時の武士に素直に受け入れられたが、一遍が武士の精神的支柱である神祇信仰を彼の思想に積極的に取り入れた点がその理由の一つとも考えられる。一遍と武士の交渉は、豊後国の守護、大友兵庫頭頼泰、備前吉備津宮の神主の子、藤井某、信濃佐久郡の大井太郎、徳太寺の候人肥前前司貞泰、武蔵のあぢさか入道、伊予三島の地頭代平忠康らとの交渉があつたが、一遍の布教が遊行という移動形態をとつたため、短期間の交渉に終わった。したがって、本格的な武士との交渉は一遍亡き後の時宗教団の成立以降が中心となる。

中世も南北朝の時代になると、武士の交渉において、時衆の僧は陣僧という形態をとつた。陣僧は時衆に限らず他宗にも見られるが、『太平記』等の史料に頻繁に登場してくるのは時衆の僧であつた。陣僧とは出陣する武士に従う、いわゆる従軍僧である。彼らの活動内容は、戦傷者の手当てや、瀕死の武士に十念を与え、戦死者に念仏供養することがその主たるものであ

つた。今回は『太平記』巻第六「赤坂合戦事付人見本間拔懸事」や『太平記』巻第二十「義貞自害事」を取り上げ、戦闘現場における陣僧の具体的な活動を検証し、その実態を明らかにする。後世の『異本小田原記』にも、陣僧が連歌で陣中の無聊を慰めたことが記されているが、時衆が室町幕府の同朋衆にその形態を変え、日本の芸能・文化の形成に大きな影響を与えた事実は、中世武士との交渉がその背景にあつたことと無縁ではないであろう。本発表においては、陣僧の芸能・文化活動については詳しく触れることはできないが、その方面も含めて今後の陣僧研究の課題の一つとしたい。

横川顕正と浄土教

和田 真二

本考は横川顕正教授の思想における、その浄土教方面に関する一考察を試みるものである。その前に教授が如何なる人であつたかについてごく簡単にふれておく必要がある。

年譜に従えば、明治三十七年大分県、真宗大谷派・善正寺に生まれた。長じて京都・大谷大学に学び、生涯の師、鈴木大拙・ビアトリクス両先生に逢い、足下で宗教学、大乘仏教学、英語を修め、昭和十五年五月、三十六歳で天逝された。しかしながら大拙先生ご夫妻との関係は、単なる先生と学生の関係ではなかつた。大谷大学の一郷教授は「その先生を自己の生涯の学

問上の、人生上の師として選択された横川教授の慧眼。その学生を受けとめた大拙先生の学生を見抜く眼。横川教授の葬儀において涙して別れの言葉を述べられ、教授夭折後の御家庭の面倒まで親代わりになってお世話せられた大拙先生の人間味。そこに、横川教授の存在がいかに大きいものであったかがうかがえる」という麗しい一文が伝えられている。又、教授の逝去におよび、大谷大学での学葬で弔辞を述べられ、鈴木先生は、「横川君、何故早く死んだ」と泣き叫ばれたそうです。「孔子と顔回を見わせられた」とのことが伝えられている。このように教授の存在は、大拙先生にとっては後事を託された愛弟子として囑望された存在であった。

そんな横川教授の二十三歳から三十六歳に逝去されるまでの十四年間に物された著作類はおよそ五十余点存在する。今これらの著作類を管見するに、我々はひとつのことに気付かされるのである。それは何かというに、横川教授の学問研究する場合の立場についてである。『鈴木大拙博士著「禅論」第二・第三輯を看て』の論評中、「宗教は先づ経験を以て出発し、爾後に（広義に於ける）哲学が来るのであって哲学的批判は、かゝる事実に基づいて行はなくては正鵠を失する。」という大拙の立場を指示し、「基督教団への仏教の理解の通路を穿ち、彼等の宗教経験の心理的普遍性に対する明敏な洞察と、諸分野に互る博識と之に加ふるに、著者自ら内に深く蔵する禅的体验を以て」、大乘仏教の経験基底を明示し得て、大乘經典研究の意味深き方法論を提示している。そして大慧の次の言葉で結んでいる。「看經の眼を具せずんば則ち經中深妙の義を窺ひ測る

事能はず」と。ここに引用した大拙先生の学的立場は、全くそのまま横川教授の学的立場でもある。

横川教授の学的専門分野は、宗教学で、神秘主義がその中心テーマである。

教授の論考『宗教的神秘主義の基本的概念』において、宗教の構成的諸要素中の神秘的要素を強調するものが、その意識においては「普通の主観対客観的区別は抹消せられて、凡てのものが一つの有機的な全一なるものに統攝せられている。」と言うように、この型の宗教を、神秘主義と言っている。ここでも、神秘主義を七種に分類し、その概念規定をしている。

神秘主義の最も高次なるものは、しばしば回心と呼ばれる。ザウレスはこの回心を『通常の回心』と『神秘的回心』とに区別している。前者は「非宗教的生活より宗教的生活への転向」を意味し、後者は「宗教的生活より神秘家の生活への転向」を意味する。この境地をキリスト教の神秘主義では凝心と呼ぶのだ、と言っている。横川教授によれば、この凝心が禅者の『忽然省悟』裡の『帰家穩坐』に通ずべく、真宗の『一念帰命』の成立直下における『安心決定』に当たるものがあるう、と言うのである。ここに至って仏教の根本経験なる正覚は、真宗にあつては「証」、禅にあつては「悟」とせられる。悟・見・即と言ひ、証・聞・如と言ひ、これらの違いは一体何ものぞ！横川言く、「それは両者の経験様式の相違による」と。